

(於北海道大学スラブ研究センター)

2006, 2, 18

Not for Citation

コミンテルン極東書記局の成立過程

—ソヴィエト・ロシア、コミンテルンと東アジアの革命運動—

ユ・ヒョジョン (和光大学)

◇はじめに

・コミンテルン極東書記局—ソヴィエト・ロシアおよびコミンテルンと、東アジアの革命運動（組織）をつなぎ、前者の後者に対する「指導」のための「中間指導機関」として1921年1月にイルクーツクに成立。

・コミンテルンおよびソヴィエト・ロシアのアジアに対するアプローチ、とりわけ東アジア革命運動へのアプローチは、ヨーロッパ革命に対する期待と、白衛軍と干渉軍によってロシアの国土が東西に分断されていたことなどから、19年末頃まではまだ低調で、おもにロシア中央にいた在留民の組織化が活動の中心をなしていた。

・コルチャーク体制の崩壊した19年末頃から「中間指導機関」の創設に向けた動きが本格化され、シベリア外交代表部東方ビューロー（1920.4）、ロシア共産党シベリア・ビューロー付き極東民族部（1920.7）を経て、1921年1月のコミンテルン極東書記局が設立される形で一応実現する。

・この一連の過程は、シベリア戦争の推移およびそれと関連したソヴィエト・ロシアの対外政策の推進と深く連動しており、その中には、戦争方針や、それと関連した「中間指導機関」の管轄権をめぐるシベリア、極東現地の諸機関や活動家のあいだでの激しい争いが含まれている。

・同時にこの過程は、ロシア在留の東・北アジア諸民族の活動家およびその運動が深く関わっており、諸民族の革命運動のための組織化および再編と同時並行的に行われ、「書記局」の主導権をめぐる争いは、ロシア人活動家とアジア出身の活動家およびその組織とのあいだでも行われた。

・そのアジア人活動家グループの中でもとりわけ韓人社会党を中心とする朝鮮人グループの存在が大きく、その間に朝鮮人運動が相対立する「上海派」と「イルクーツク派」の二つのグループに分立する厄介で深刻な事態が生まれる。

・これらの全過程には、その後も、さまざまな場面で現れる「国際主義」をめぐる原理的、実践的な問題が多く提起されていたという意味で、コミンテルンとアジアの関係総体を考える上でも、きわめて重要と考えられる。

○研究史

○資料

・ロシア国立社会政治史文書館（РГАСПИ）

①「執行委員会 東方書記局」

②「執行委員会」（幹部会、書記局、（小）ビューロー）

③各国（朝鮮、中国、モンゴルなど）共産党関係ファイル

④コミンテルン第1、2回大会

⑤ロシア共産党中央委員会

⑥同極東ビューロー

・国立ノヴォシビリスク州文書館（ГАНО、ノヴォシビリスク）所蔵文書

ロシア共産党中央委員会シベリア・ビューロー、文献⑩

一、ロシア外務人民委員部シベリア代表部

（1）シベリア外交代表部（Сибирская Миссия Народного Комиссариата по Иностранным делам）

1920年1月、シベリア革命委員会に付属する形で設立。3人のメンバー（ヤンソンとヴィレンスキー、「軍関係活動家」1人）から構成された。シベリア領内における外国の代表およびその他あらゆる政治的集団との交渉を担当することになり、3人のメンバーは「東」の各地に（ただし、代表部の任務や役割、および中央および地方の各機関との組織的關係などは明らかでなく、創設の経緯も不明な点が多い）。

職員（協力者，сотрудник）の中には朝鮮人も多く、彼らはヤンソンに同行してイルクーツクに。一方、ヴィレンスキーはヴラヂヴォストークにおもむき、対日交渉の傍ら、朝鮮人、中国人の革命的組織と関係を樹立し、上海にヴォイチンスキーらを派遣する。5月同地に「コミンテルン東アジア書記局」を設立。

（2）外務人民委員部と在留中国人、朝鮮人の革命運動

19年11月にオムスクで14人の朝鮮人がロシア共産党への入党許可を請願。

その直接のきっかけは、モスクワからシベリア各地に派遣された朝鮮人扇動家の活動で、この派遣は、それまでにヨーロッパ・ロシアにはほぼ限定されていた中国人、朝鮮人に対する組織化作業の延長線上にあり、「東」に向けたモスクワのアプローチの本格的な始まりを示すもの。

ヨーロッパ・ロシアおよびシベリアには主に1次大戦期に戦時労働力として流入した10～20万の中国人と2万の朝鮮人が在留。

10月革命後、外務人民委員部の主宰のもとに彼らに対する組織化がなされ、「旅俄華工連合会」が設立され、「(大韓)国民会」が復活、再編される。

それらの代表がコミンテルン創設のための準備大会や創立大会に参加

朝鮮 3・1 運動、中国 5・4 運動および赤軍の反撃の本格化をうけ「東」への進出を本格化し始める（7月25、26日における中国、朝鮮向けの「カラハン宣言」）

19年末に極東から韓人社会党の代表がモスクワ入りし、コミンテルン、ソヴィエト・ロシア政府を相手に新たな活動を開始。

二、シベリア外交代表部東方ビューロー

（1）複数の「東方ビューロー」構想

1920.3.27 ロシア共産党シベリア・ビューロー会議で、「朝鮮革命委員会」設立問題を審議し、対処方を中央に具申。

1920.3.30 イルクーツクで、同市の国民会、共産党韓族部など朝鮮人諸組織の代表とシベリア外交代表部との合同会議が開かれ「中国人、朝鮮人共産主義者ビューロー（Восточно-Сибирско Бюро Корейских и Китайских Коммунистов）」設立問題を協議。

（2）「東方ビューロー」の設立と組織構造

1920.4 イルクーツクに「東方ビューロー-Восточное Бюро при Сибирской Миссии Народного Комиссариата по Иностранным делам」設立。

1920.5.18 外交代表部のガポンの主宰のもと第一回「東方ビューロー」会議が開かれ、ガボンに、朝鮮人（蔡グリゴリ、李仁燮）、ブリヤト人（リンチノ、ボリソフ）、中国人（リュウーラオ、他一人）からそれぞれ2人ずつ、計7人からなるビューローの構成が決定され、各民族の中の急進的、革命的諸組織との幅広い連携を視野に入れ、それらの組織を、ビューローを中心に統合していくとの方針の下に、幅広い宣伝・煽動、出版活動、武器を含めた各種物資の提供、さらには幹部または軍事指導者要請のための学校の設置など積極的な援助を与えていくことを内容とする「事業計画大綱」を採択。

（3）韓人社会党と東方ビューロー

1920.6.9 イルクーツクで「東方ビューロー」とモスクワ帰りの韓人社会党の二人の代表との合同会議。「ビューロー」をシベリア代表部から切り離し、コミンテルンの東方部としての承認、東方事業全体をそれに一致させることなどについて、ガボンと朴鎮淳と一緒にモスクワの党中央委、外務人民委員部、コミンテルンと協議することを決定；「東方事業」が韓人社会党のイニシアチブで進むことに。

韓人社会党；1918.5 ハバロフスクで創設された朝鮮人最初の社会主義組織

1919、朴鎮淳を中心とする3人の代表がモスクワ入りし、コミンテルン執行委員会ビューロー会議に出席し、党のコミンテルンへの加入を承認される。

同日の会議では東方諸民族に向けてのコミンテルンの呼びかけを準備する担当者が決まり、朴には

朝鮮向けとともに、ヴォズネセンスキーとともに日本向けの呼びかけを準備する仕事を与えられる。ソヴィエト・ロシア政府とも交渉し、援助資金を得、二人の代表は帰路につき、朴はモスクワに残り、幅広い活動。

「東方ビューロー」設立への動きの報に接し、時期尚早やシベリアには有能な担い手がいないことなどを理由に、反対の意思を表す。

三、「極東書記局」のためのたたかい

(1) ロシア共産党シベリア・ビューロー極東民族部

1920.6.15 党シベリア・ビューロー、「東方事業」にかかわって、1, オムスクおよびヴェルフネウディンスクの「朝鮮人・中国人中心」をイルクーツクに移動させ、彼らに関する事業の推進をガボンに委任すること、2, イルクーツクで朝鮮人共産主義者大会の開催許可を決定。

つづいて同 25 日の会議で、同ビューローの中国人・朝鮮人課もイルクーツクに移し、同課の事業指導をゴンチャロフに委ね、ガボンを外交代表部におけるヤンソンの代理とし、その事業指導をシュミヤツキーに委ねることを決定→「東方事業」をシベリア・ビューローのもとに掌握する体制の形成。

一連の調整過程を経て、「東方ビューロー」を改編する形で、7.27.ロシア共産党中央委員会シベリア・ビューロー付き東方民族部（Секция восточный народов при Сибирское бюро ЦК РКП(б)）が設立される。部長ブルトマン、副部長ガボン、28 日の第 2 回会議で、まず朝鮮課、中国課を設立。後にモンゴル・チベット課も。日本課も設立される予定であったが、担い手がおらず、実現されなかった。朝鮮課は特使 1 人を上海に派遣したりしたが、対外活動はきわめて限定的。

(2) 第一回朝鮮人共産主義者大会

7.7-15 イルクーツク、開催の経緯ははっきりしないが、韓人社会党代表のイニシアチブのもとに共産党イルクーツク県韓族部によって呼びかけられたもののよう。もともとは 6.15 からの予定であったが、シベリア・ビューローの反対で延期されていた。シベリア・ビューローの全面的なバックアップのもとでのこの時期での開催は同ビューロー側による韓人社会党に対する本格的な巻き返しを図るため。

大会は、「イルクーツク派」が主導し、朝鮮革命の最高指導機関として「韓人共産党中央総会」＝「高麗共産団体中央」Центральный Комитет Корейских Коммунистических Организаций を設立。国民会など既存の在留団体に対する批判がなされ、その解散を決定。韓人社会党に対しては『共産主義綱領』への合流を呼びかける」という形で、排除はしないが、あくまでも従属させるという姿勢を貫き、韓人社会党代表の内一人には（大会は「共産主義団体」の大会であり、「社会党」には正式な参加資格はないとの理由で）発言権のみ与える。「韓人共産党中央総会」と東方民族部朝鮮課（「韓族部」）は実質上一つ。ただ、後者の課長はロシア人で、この点をめぐって朝鮮人側から疑問や不満も。

(3) 東方民族部と韓人社会党の攻防

第2回大会(7.19-8.6)の直後からコミンテルン執行委員会で「中間指導機関」の設立に向けた動きが本格化され、そのために上海に信頼できる人物を派遣することが検討されはじめる。この動きにはシベリア・ビューローもかかわり、同ビューローとの連絡関係の重要性を提言。

一方、7.19からのコミンテルン第2回大会には、朴鎮淳が韓人社会党の代表として参加し、直後の8.8の執行委員会会議で極東担当の執行委員に選ばれ、極東事業の中心の一人として活動する。自らが上海に赴くことを提案するが、「事業」の具体的な計画づくりが終わるまで延期することになり、「呼びかけ」案の作成を委任される。

シベリアでの「極東(民族?)大会」の開催が計画されはじめ、その準備作業に吉原太郎が加わることが決定される。

9月末に劉沢榮(ラウ・シン・ジウ)を「大会」準備のためイルクーツクに派遣することが決まり、朴もこのころシベリアにおもむき、10月オムスクで「全ロシア高麗人大会」を開催。

「高麗人大会」で、韓人社会党側と、「高麗共産団体中央」およびシベリア・ビューロー側が再び激突し、後者の勝利に終わるが、モスクワの方針は、後者を中心としつつも、朴鎮淳らも加えて協力させるという曖昧なもの。

(4) 「書記局」をめぐるシベリア・ビューローと極東ビューローのあらい

「チタの栓」の突破を受けて、極東共和国の首都チタニ移転。この直後(日付不明)に東方民族部の管轄もシベリア・ビューローから極東ビューローに移る。以降、この是非をめぐる、モスクワを挟んで両ビューローの間に激しい応酬が繰り返される。

同じ頃の11.24に極東ビューロー付きに、共和国領内の朝鮮人共産主義すべての勢力の統合のために「韓人部」が設立され、韓人社会党側の新たな拠点として、朴鎮淳らと連絡しながらロシアのみならず、朝鮮国内、上海、間島などの共産主義勢力の結集、コミンテルン「東方事業」の中心になることを目指して動き出す。

(5) 極東書記局の創設

21.1.5 ロシア共産党中央委員会、東方民族部をコミンテルンの管轄下に移管することを決定。1.15 これを受けてコミンテルン執行委員会、イルクーツクに書記局の形でコミンテルンの代表部を設立すること、シュミヤツキーを極東全権として任命し、民族部の再編作業を委任することを決定。

2.15 書記局指令第1号が発せられ、新しい体制がスタートする。「中国、日本、朝鮮、チベットおよびモンゴルにおけるすべての共産主義事業と革命事業を調整する機関」として、上記の4つの国および地域を担当する課がおかれる。100名弱の人員と自前の建物や付属の宿舎を有し、自動車や馬車、図書館なども保有。東方民族部は解散し、同部の職員と財貨は、1.11に解散されたシベリア代表部と同様に、書記局に移る。

○むすび

極東ビューロー韓人部に対してはいち早く 1.26 に同部の極東書記局への移管を通知し、2.8 シュミヤツキーが韓人部会議に直接乗り込み、服従を命令。しかし、韓人部側は、これを無視し、予定の計画を推進しつつ対抗。結局事態は、二つの「高麗共産党」の同時設立 (21.5)、両者の直接の武力衝突 (「自由市事変」=「アムール事件」、21.6) に突っ走り、朝鮮人運動の二つのグループへの分裂・対立が決定的となる。

一方、中国関係においては、ヴィレンスキーやヴォイチンスキーによって築かれた流れが、ヴィレンスキーや朴鎮淳の失脚後、一定の調整を経て基本的にはそのまま活かされていく。

■関連文献

①二木博史「モンゴル人民革命党成立史の再検討-『ドクソムの回想』を中心に」(『東京外国語大学論集』第49号、1994年)

②石川禎浩『中国共産党成立史』、岩波書店、2001年

③和田・劉・水野「コミンテルンと朝鮮-コミンテルン文書資料に基づく若干の考察」『青丘学術論集』、韓国文化研究振興財団、第18集、2001年

④В.Д.Пак. *Корейцы в Советской России*. М.-Иркутск-С.Петербург.1995 г.

⑤임경석『한국 사회주의의 기원』、역사비평사、2003年

(林京錫『韓国社会主義の起源』歴史批評社、2003年)

⑥Ч.Дашдаваа. *Улаан туух Коминтерн ба Монгол*, Улаанбаатар, 2003

(ダッシュダバー『赤い歴史-コミンテルンとモンゴル』、ウランバートル、2003年)

⑦栗原浩英『コミンテルン・システムとインドシナ共産党』東京大学出版会、2004年

⑧ Персиц М. Восточные интернационалисты и некоторые вопросы национально-освободительного движения. (1918-июль 1920 г.). Коминтерн и Восток.-М., 1969.

⑨Persits M.A. "The Formation of the Communist Movement in Asia and Revolutionary Democracy in the East." Ulyanovsky R.A. (ed.) *Revolutionary Democracy and Communists in the East*. Moskow.1984.

⑩ВКП(б), *Коминтерн и национально-революционное движение в Китае. Документы*, Т.1, М., 1994

⑪Дальневосточная политика Советской России (1920-1922гг) Сборник документов Сибирского бюро ЦК РКП(б) и Сибирского революционного комитета. Новосибирск. 1996.

⑫ВКП(б), *Коминтерн и Япония 1917-1941*. М., 2001.

⑬Ю Хё Джон." Российская революция, «Сибирская война» и российские корейцы.1917-1922 гг." *Новый мир истории России. Форум японских и российских исследователей*. 2001.